

# 徳富蘇峰記念館

目録 — (21)

## 海を渡った先覚者 (三)

展示期間◇平成十六年一月五日〜十一月二十九日

### はじめに

「徳富蘇峰宛書簡目録」を一九九五年(平成七年)に出版して、はや九年になります。研究者や先生方、見学なさる方々がそれぞれの好奇心を持って、知りたい人を探したり、過去に活躍した人の名を見つけて喜んでりされています。一万二千人からの蘇峰への書簡は全体で約四万六千通です。書簡の中の人と付き合っている内に、手紙の周辺が読み取れるようになることがあります。「海を渡った人」ではインターネットから職員宮崎が北城孫人、山田忠澄がどういう人であるのか探し出しました。「布衣の農相」と言われた前田正名は職員和田が調べ、特徴ある書体の書簡を展示しています。

書簡を読んでいると、それを書いた人に親しみを感じることがあります。私が最初に中江兆民に心惹かれたのは、兆民が「婦人改良の一策」(『国民之友』二五号 明治二十一年七月)で、「女人が学問をして、文芸、政治の考えが出来るようになり、男子の漸に入ることが、生意気というならば、女人が早く生意気になることを望む」と言っていることを読んだときです。「女人が人形世界に沈淪していた時から生じた習慣の盲雲を払って勇氣を出させ、漢語を使わせ、漢文崩しの漸をさせることが肝要である」と述べていることです。ちょうど同じころ蘇峰は『東京婦人矯風雜誌』三号(明治二十一年六月)に、「婦人の社交上に於る勢力」と題し、「婦人が社交場において勢力を振るいたいと考えるなら、漸の種の多くなるようにしなければ、到底矯風会の主義すら貫くことが出来ませんよ」と忠告していることです。男子の奴隸だ地位が低いのと不平をいう前に、家庭において賢く、外に出て常識を備え、知識を身につけ話題の一つも提供出来る魅力ある女性になることを望んでいます。知識において、兆民と蘇峰は婦人に対し、自分の考えを持つことを望んでいます。

もうひとつ私が思い出すのは勝海舟の言葉です。「己れに執一の成見を懐き、之を以て天下を律せんと欲す。是れ王者の道にあらず。兇足鶴脛、同じかざるも、各その用あり、反対者には反対せしめよ、異論者には異論せしめよ。我の為す所是ならば、彼等亦た必ず悟る時あらん。窮屈逼促は天地の常道にあらず。いつも忘れない言葉は兆民と蘇峰と海舟の生きた教えです。さて、新島襄が創立した同志社からは、多くの海を渡った先覚者が出ました。(『同志社山脈』113人のプロフィール)同志社山脈編集委員会編)。その中の一人、森次太郎は愛媛県で正岡子規の幼なじみであり、同志社で学び、明治三十四年エール大学に本物の英語を学びにいった若者でした。馬場恒吾と森次太郎が同志社に学んだことは、初めて知りました。歳は次太郎の方が五歳上です。

戦時中の昭和十九年九月三日に毎日新聞に掲載された蘇峰の「呑敵の気魄」という文章について二人はそれぞれに手紙で意見を述べています。次太郎は、「先生の呑敵の二字を特にお用ひ成されたお心持ちは御察し致しますが、陳腐なやうでも矢張り「必勝の気魄」位の方が穏やかでないでせうか」と六十七通ある次太郎の蘇峰への書簡の中で、ただ一度蘇峰に反対している手紙です。次太郎は同志社で人の人格を傷つけない礼儀と、エール大学で、アメリカに対して「呑敵」などと言わない方が良いという紳士らしい態度が身についたのでしよう。馬場の「呑敵」への感想の手紙を紹介しましょう。馬場は喜んで読み、「毎日新聞にて『呑敵の気魄』を拝読、今更ながら先生の気魄に感動せしめられ候。未だ第二回目を見されども然らば目下の日本に何人が此気魄を有するものなるか。それをして国政を担任せしめる途ありやといふ問題になると頓と行詰り候。前欧州大戦の時、老新聞記者クレマンソーが出た如く或は時艱を救ふべく先生を煩はす方法はなきものなるか。(中略)今日の一文拝見して颯爽たる昔日のお姿を偲び候(後略)」という感想を手紙で伝えました。

今年の特別展の主題も「海を渡った先覚者(三)」です。外国からの絵葉書展示に加え、奈良の板戸、印と印譜なども展示しました。今年度の展示は十一月二十九日までです。開館日は月・水・金曜日です。御来館をお待ちしております。

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
大山 巖 4通	1842～1916 天保13～大正5 鹿児島県	明治期の陸軍軍人。西郷隆盛の従弟。薩英戦争、戊辰戦争の功により明治3年フランスに留学。普仏戦争を見学、一時帰国後再びフランス留学。明治17年鳥尾小弥太、野津道貫、川上操六、桂太郎ら陸軍の俊秀を率いて渡欧、各国の兵制を視察した。	欧州 ロシア 満州
岡本 かの子 2通	1889～1939 明治22～昭和14 東京	歌人・小説家。跡見女学校卒。「明星」「スバル」に歌を発表。明治44年「青踏」に参加。昭和4～7年漫画家である夫、岡本一平と息子太郎と共にパリに滞在。帰国後は小説家として作品を書き続けた。著書『鶴は病みき』〈展示書簡〉昭和12年7月13日付 「御機げむうるはしくゐらせられ かげながら嬉しく存じあげをります さて今年のはじめ 日々新聞にて拙著女性の書にあまさずばかりの御讃め言葉をたまはり ありがたく 早速参上 御禮申述べたくぞんじおりながら御尊用を御邪魔いたすもとさしひかへられ つい御無沙汰にうちすぎをりました」 一平は、「かの子」が書いた『仏教読本』の為に、推薦の言葉を頂きたいという書簡(昭和9年11月21日付)と、「かの子」が生前に手書した観音経一巻の複写を拝呈する」という挨拶状(昭和14年6月・太郎と連名)を蘇峰に出している。	フランス
堅山 南風 24通	1887～1980 明治20～昭和55 熊本県	日本画家。本名熊次。はじめ高橋広湖に、その後横山大観に師事。主として院展で活躍。大正5～6年にかけて画境の打開を求め、インドに渡った。戦後は日展にも出品。昭和41年、先に焼失した、日光輪王寺薬師寺の龍の天井画を復元。昭和43年に文化勲章受賞。長く交流のあった徳富蘇峰の肖像画を依頼された時、南風は蘇峰の内面を描くところまでいってみたいと語ったという。その描写には大変な苦勞があったものの会心の出来で「これで肖像画を描くのはやめにしようか」と話すほどであった。	インド
勝 海舟 (麟太郎) 10通	1823～1899 文政6～明治32 江戸	江戸・明治時代の政治家。大政奉還の後、徳川家康以来三百年間日本の政治の中心であった江戸城を、西郷隆盛と会いし、平和的無血のうちに明け渡した。蘇峰はこれを高く評価し、この偉大な出来事を詩に詠んだ。 堂々錦旗 関東を圧す 百万の死生談笑の中 群小は知らず 天下の計りごと 千秋相対す両英雄 この詩碑は、東京大田区洗足池畔にある。 海舟は蘇峰の父一敬の古稀に際し次のような漢詩を贈った。 徳厚古稀叟 終始只謹恭 膝下有之子 卓爾一蘇峰	アメリカ
川上 音二郎 1通	1864～1911 元治1～明治44 福岡県	新派劇の俳優。明治32年パリ万国博覧会で演じる為に一座で渡航。 〈展示書簡〉明治32年6月28日付 テムズ河畔の絵葉書 拝啓 一座演劇八昨日廿七日バッキンガム王宮内ニ於て英国皇太子殿下ウエールス親王ノ上覧ヲ忝フシ終演後特ニ拝謁を賜ヒ尚賞與金トシテ金貳千円下賜相成り候 右ハ 生苦ノ面目ニ御座候俛此段不取敢御報奉申上候 敬白 賞与金の二千円は現在の貨幣価値に直すと一千万円近い額になると思われる。	イギリス アメリカ フランス
川上 俊彦 2通	1861～1935 文久1～昭和10 新潟県	明治・大正期の外交官。東京外国語大卒。ウラジオストク駐在中、日露開戦に際し、ポーランド独立運動の指導者と接触。その縁でポーランド独立後、初代公使赴任。その間ハルビン・モスクワ各総領事をつとめる。伊藤博文が暗殺された時に、通訳として同行し、銃弾を受けた。	ロシア ポーランド 中国

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
川上 常盤 9通	1875～1959 明治8～昭和34 北海道	川上俊彦(外交官)夫人。女子学院入学。明治37年正月、浦塩(ウラジオストク)より、夫俊彦と連名の絵葉書展示。他に封書として以下のような書簡がある。 昭和24年2月17日付「半世紀以上も昔のこと、先生米国から御同船のバック公使夫人に私をご紹介下されたおかげで、後日私が外交官の妻としての生活にいかほど有益であったか。またご発行の英文雑誌に坪内逍遙氏の劇を私に英訳させていただいた事なども誠にオモイで深く、あの頃から勉強を続けて居たら今頃は一かどの英文学者にもなり得しか…」(要約) 昭和27年2月8日付「矢島楯子先生の御紹介にて御許様にはお目にかかり、「Far East」や婦人雑誌などに時折り書かせて頂きし半世紀あまりも前の事ども、思い出し御厚情の数々、うれしく…。あの頃は夢多き娘時代でしたがいつしか七十八の老媪とはなりしが、たのしかりし事は幾とせ経ちても消え申さず。」(要約)	ロシア
川島 甚兵衛 1通	1853～1910 嘉永6～明治43 京都	父・初代甚兵衛のあとをひきつぎ川島織物工場を設立。丹後縮緬の改良などに力を入れる。品川弥二郎に従い、渡欧。フランスでゴブラン織を研究した。	フランス ヨーロッパ
川島 浪速 1通	1865～1949 慶応1～昭和24 長野県	明治～昭和期の大陸浪人。外国語学校中退。日清戦争の軍事通訳。台湾総督府官吏。満蒙独立運動を画策。川島芳子(清国皇族肅親王の14女)は浪速の養子。 〈展示書簡〉昭和14年5月晦日 先般は喜寿御祝の記念品結構なる御献納御寄贈被下難有拝受仕候 永久珍藏可仕候 早速御挨拶可申上候処月初より旅行中にて遅延致候 御諒恕仰上候	中国
河田 嗣郎 71通	1883～1942 明治16～昭和17 山口県	社会経済学者。国民新聞社員。京大教授。農政学・社会政策学を講じる。外国からの絵葉書が多い。 〈展示書簡〉大正三年六月五日付 「愈々巴里の人となり上記に止宿致候 嶋崎藤村氏と同宿に御座候 巴里は賑かな中に自ら静かな心持のある所にて居心地宜敷候 御報告まで」 第14区ポートロイヤル通り 86番地のマダム・シモネエのパンションに下宿。嶋崎藤村も同宿であった事を報告している。シモネエの下宿には、考古学者の浜田青陵、詩人の野口米次郎、劇の巡礼者生田葵などがいた。(河盛好蔵『藤村のパリ』参照)	ドイツ フランス 台湾
北城 孫人 4通		無線電信講習所教官。外国からの絵葉書が多い。モールス符号を暗記する合調音を発案し、陸軍通信隊は、すぐ北城孫人が創案した連想暗記法を採用した結果、いままでにない短期間でモールス符号を新兵に覚えさせることができた。(電気通信大学80年史資料編集委員会ホームページ参照) 〈展示書簡〉( )年7月20日付 神が雲間より幼子を、羊飼いの夫婦が祈る地上へさしだしている絵葉書 先生の御健在ならん事 国家の為希願仕り候 世界各地の凡そ日本通貨の価値 騰れるに支那に於て反対の現象は慨歎に不堪次第に候 マルセーユにて	イギリス パラオ フランス
九条 武子 3通	1887～1928 明治20～昭和4 京都	歌人。西本願寺法宗主大谷光瑞の妹。男爵九条良致と結婚し、共に渡欧したが1年余りでイギリスから単身帰国。才色兼備の歌人として知られた。十年余の夫への思慕と孤閨をうたった歌集『金鈴』、随筆集『無憂華』は世の同情を集めた。佐々木信綱の「竹柏会」に参加。仏教婦人会長など、社会慈善事業に尽力。東山女子専門学校(京都女子大)を創設した。	欧州
国木田 独歩 (哲夫) 3通	1871～1908 明治4～明治41 千葉県	明治・大正期の詩人・小説家。「国民新聞」に入り日清戦争の従軍記者となり、弟取二に宛てた「愛弟通信」で文名をあげる。『国民之友』の編集に従事。佐々木信子と恋に落ち、結婚、離婚などで蘇峰に世話になる。代表作「欺かざるの記」「武蔵野」「源おじ」など	中国

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
桜上 尊融 1通		明治41年1月チリ バルパライブよりの絵葉書	チリ
佐々城 信子 (国木田) 1通	1878～1949 明治11～昭和24 東京	父は仙台藩士出身の医師佐々城本支。母は社会活動家佐々木豊寿。両親ともキリスト者。相馬国光は従姉。海岸女学校(のち青山女学院に併合)に学ぶ。有島武郎の『或る女』のモデル。佐々城家で開かれた日清戦争従軍記者招待晩餐会で独歩と知り合い結婚、そして5ヶ月後には離婚。明治34年9月に親戚会議で強制的な結婚を押しつけられ、アメリカへ追いやられようとしたが、その船(鎌倉丸)の事務長武井勘三郎と恋におち、アメリカに上陸せず日本に引き返した。同船していてそのことを知った鳩山春子はスキャンダルとして新聞に告発した。	アメリカ
佐佐木 信綱 (竹柏園) 161通	1872～1963 明治5～昭和38 三重県	明治・大正・昭和期の歌人・国文学者。「万葉集」の研究、和歌・歌学の史的研究・校訂・評釈・外国語訳などの多くのすぐれた業績を残した。明治31年「心の花」を創刊「竹柏会」の指導に努めた。姓は元来「佐々木」であるが、明治36年32才の時、南中国に旅行した際に使った「佐佐木」の名刺を記念して生涯「佐佐木」とする。昭和12年文化勲章受賞。蘇峰は短歌の添削を佐佐木信綱に見てもらっていた。	中国
鈴木 春 18通	1880～1979 明治13～昭和54	日仏銀行支配人。湯浅治郎(明治・大正期のキリスト教社会運動家 1850～1932)と初子(蘇峰の姉)の長女七の夫。明治の外国からの絵葉書が多い。島崎藤村はフランスに滞在していた大正四年に鈴木夫妻の家をよく訪ねた。(河盛好蔵『藤村のバリ』参照) 〈展示書簡〉明治43年9月23日の絵葉書 「昨今来着ノ日本新聞ニ依レハ東京地方一円ニ非常ナル大洪水ノ由驚入申候 別乃被害モナカリシヤ 茲ニ不取敢御見舞申述候 敬具 倫敦ニテ」 明治43年8月8日に関東・東海・東北地方一帯に豪雨があり大洪水となり、鉄道・通信は不通、浸水が44万3千戸、うち東京府は18万5千戸となった災害に対する見舞いの葉書である。(『近代日本総合年表第三版』岩波書店参照)	イギリス フランス 香港 シンガポール
双鶴 2通		京城から美しい手書きの絵葉書 〈展示書簡〉 大正5年5月14日付「当地は全く初夏の候と相成 鶴は大櫛に新巢を作り初め早朝より騒しき事に候 鶴巢居見物人毎日曜に有之 生徒を引率したる小学先生なども参りて作文の参考にに致す模様候」 大正5年4月20日付「只今連翹躑躅の満開、杏は一兩日中の内に花蕾を破る模様候 白雲洞は春 十二分に御座候」	朝鮮
高浜 虚子 (清) 17通	1874～1959 明治7～昭和34 愛媛県	俳人・小説家。ホトトギス主幹。正岡子規に師事。漱石の友人。大正13年満州・朝鮮を旅し、昭和11年渡欧。通過した熱帯の風物を夏の季語に収めることを提唱し、紀行を「渡仏日記」にまとめた。戦時中は日本文学報国会俳句部会長をつとめた。	満州 朝鮮 欧州
津田 仙 2通	1837～1908 天保8～明治41 千葉県	明治時代の農学者。津田梅子は次女。安政5年外国奉行となる。慶応3年渡米。明治6年ウィーンの万国博覧会に出席。西洋の野菜、果樹の栽培・普及に努めた。キリスト教徒となり、青山学園女子部を創立。禁酒・禁煙運動、盲哑教育にも尽くした。 〈展示書簡〉明治32年7月12日付 拝啓 仕候 然ば 去る九日岩本善治儀 公判の末無罪と相成旨 同人より通知有之候 全くご尽力の結果 深く感佩仕候 一兩日中出京 該大臣に御礼にまかりいで候へども御ついでに御座候はば尊兄よりもよろしく御礼仰上度 右御札まで申上度 早々拝具	アメリカ ヨーロッパ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
新島 襄 13通	1843～1890 天保14～明治23 江戸	明治期のキリスト教の代表的教育者。展示書簡は帖仕立にした8通の長文書簡である。新島は重要な書簡は一夜枕許に置き、翌朝これを再読し、感情が過激に過ぎないことを確かめてから投函したといわれる。展示8通の中には「御一覽ノ上ハ焼捨被下候」「他見無用」と記されたものがある。 〈展示書簡〉明治22年6月22日付 草不謝榮於春風 木不怨落於秋天 誰揮鞭策駟四運 万物興歇皆自然 如此小生之生死も偏に天父之手裏に在り存する事なれば、人間榮枯之如きは喜ぶにも足らず。又悲しむにも及ばず。親友中区々たる誤解も強て弁解するに及ぶ間敷、又差々たる世評も敢て意とするに足らず。従容身を自然に委ね魂を天父に任せ、慎て棋理内に徘徊するを以て畢生之大歡樂となし、甘んじて小生之デスティニーに達せんと覚悟致し候て、聊平安を心に曉申候。扱小生も平素多病之事なれば、今より活眼を開らき小生之後任を注目し置くは、余り杞憂に過ぎたる事とは存じ不申候て、後任者指名の義は、遙かに小生に優れたるメンタマを具有し賜ふ貴兄之御意見にお申置度候間、左様御承引被下度候也	アメリカ ヨーロッパ
農相 一行 2通		明治43年6月14日バンガリー プタベストの王城玄閣と プタベスト博物館に於ける農相一行の写真葉書 2枚を展示。	ハンガリー
服部 金太郎 2通	1860～1934 万延1～昭和9 江戸	明治・大正期の実業家。服部時計店創業。貧困な夜店商人の家に生まれ、13才より唐物屋に奉公。明治7年より時計店で修繕販売に従事。明治14年独立し服部時計店を開業。明治33年欧米時計工場を視察し、帰国後工場設備の一新を図った。大正13年10石モリス型腕時計「セイコー」を発売、これをきっかけに「セイコー」を商標とする。赤十字初め各種社会事業に貢献した。 〈展示書簡〉( )年2月16日付 去十四日帝国ホテルに御愛招を蒙り大谷光瑞師之有益なる御講演を拝聴し感佩之至りに存奉候 不取敢御礼まで 如斯に御座候 敬具	欧米
馬場 恒吾 32通	1875～1956 明治8～昭和31 岡山県	大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。「Japan Times」入社後渡米し、ニューヨークで英文雑誌「Oriental Review」の編集長をつとめた。大正2年帰国し、ジャパントイムス編集長。国民新聞外報部長。リベラルな論陣を張った。日本新聞協会会長。正力松太郎がA級戦犯になった後を受けて読売新聞社長に就任した。 〈展示書簡〉昭和21年9月29日付 (前略)今日激励の御言葉を拝し 百万之援兵を得たるよりも感激いたし候 外道百万之衆正義の一棒にシカスの一句小生を奮発せしめ候、小生元来争を好まず 小生一個の事ならば寧ろ初めから負けた方が面倒でなくてよいと思ひ候か同胞をこれ以上の苦難に陥んとする企圖に対しては、柄にもない事ですが出来るだけ頑張り居り候 尤も争議も百日以上になり小生も免疫の如く、大して苦勞もいたさず候 それよりも先生の御健筆とシッカリした絵筆を見て御病中とは云へ御元気の程を拝察非常に喜ばしく且つ安心いたし候、(中略)小生も最も不適任なる新聞社長を引受け候も其内何とかのんきな日も来るべしと思ひ居る次第に御座候(後略)	ニューヨーク
浜尾 新 8通	1849～1925 嘉永2～大正14 兵庫県	明治期の教育学者。東大総長。枢密顧問官。藩命により英・仏学を学ぶ。東大副総理として創立当初より東大とともに歩む 明治18年学術制度取り調べのため、ヨーロッパに派遣される。明治26年東大総長。明治30年松方内閣文相。	ヨーロッパ
浜口 雄幸 1通	1870～1931 明治3～昭和6 高知県	大正・昭和期の政治家・財政家。民政党初代総長。明治15年外務省に入り天津領事・パリ在勤書記官などを務める。朝鮮駐在公使を最後に官を退き、大阪毎日新聞社長となる。腐敗した政党政治の刷新をはかる。ロンドン軍縮会議調印。国際協調主義を貫いたところから、軍部・右翼とこれに呼応する枢密院・政友会から「統帥権干犯」と非難が高まり、昭和5年東京駅で右翼青年に狙撃されて重傷を負った。威厳ある特異な風貌と篤実な人柄から「ライオン宰相」と呼ばれた。	イギリス

氏名(号) (蘇峰宛番簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
原 敬 (一山) 1通	1856～1921 安政3～大正10 岩手県	明治・大正期の政治家・ジャーナリスト。寺内内閣が倒れた後、政党政治家として最初の政党内閣を組閣。平民宰相として世論の支持を受けた。「大阪毎日新聞」社長。東京駅頭で暗殺された。	フランス 中国 朝鮮
原 夫次郎 3通	1875～1953 明治8～昭和28 島根県	司法官僚出身の政治家。グルノーブル文化大、パリ大学大学院卒。島根県初代知事。 〈展示書簡〉明治41年12月17日付 グルノーブルよりの絵葉書 正面の建築物は当グルノーブル法文両大学講堂ニシテ芝面の庭園ハ公開散歩場ナリ 又後方白雪ヲ頂ク山峰ハ所謂アルプス山嶺ナリ 御参考マデニ御覧ニ供シ候	フランス
人見 一太郎 (呑牛) 64通	1865～1924 慶応1～大正13 熊本県	明治・大正期の評論家・新聞記者・実業家。大江義塾時代からの蘇峰の同志。民友社創設に尽力。「文学会」出席。明治30年民友社を去る。後藤新平が台湾総督の時に台湾における製糖の仕事をする。人見が100年前にフランスで聖書朗読の一節を蝋管に録音したものが、日本人の声を録音したもので現在一番古いものとされている。著書『十二文豪ユーゴー』 〈展示書簡〉明治34年12月1日付 ロンドンより 凱旋門の絵葉書 益々御健勝奉大賀候 一昨朝当地ニ安着仕候 朝来雪フリ候へ共未だ格別ノ寒サも感じ申さず候 昨夕は天長節夜会にて村田少将ト大兄ノ事 米遷氏ノ事 御噂致候 倫敦にて 松方幸次郎氏ニ面会仕候 同氏モ近日当地に参らるる筈ニ御座候 後藤氏は目下露西滞在 愈十二三日出発ノ筈に御座候	フランス アメリカ ロシア スイス
深井 英五 107通	1871～1945 明治4～昭和20 群馬県	財界人・官僚。同志社卒。国民新聞社・民友社記者。明治29～30年蘇峰と共に欧米旅行。トルストイを訪問した時、蘇峰は詩吟を、深井は君が代を披露した。明治34年日銀検査局調査役をふりだしに、昭和10年日銀総裁就任。その間、パリ講和会議、ワシントン軍縮会議、ロンドン国際経済会議などに全権または全権随員として列席。著書『回顧七十年』 〈展示書簡〉明治40年2月9日付 ロンドンよりターナー画の絵葉書 「ハリソン」ト「ケムペール」前便ニテ差出候「ケムペール」ハ注文ノ際心付カズシテ製本ノ上等ナラザル方発送、遺憾ニ存居候 其他御望ノ本心懸居候 明后日又巴里へ出張ノ筈ニ候 倫敦ニテ	欧米 アメリカ
藤田 茂吉 (鳴鶴) 1通	1852～1892 嘉永5～明治25 大分県	明治期の新聞記者・政治家。佐伯藩で漢籍を学んだ後、明治4年上京。慶応義塾で福沢諭吉に認められる。矢野龍溪の親友。「郵便報知新聞」主筆。立憲改進黨の組織に参画。シェイクスピアの諸作品を翻訳。「東京日日」の福地源一郎と論戦、自由民権を主張した。	欧米
二葉亭 四迷 (長谷川辰之助) 3通	1864～1909 元治1～明治42 江戸	明治期の小説家・ロシア文学の翻訳家。東京外国語学校露語科中退。蘇峰・森田思軒・朝比奈知泉主宰の第1回「文学会」には旅行中で出席できなかった。坪内逍遙が大正14年7月号の早稲田文学の『回憶漫談』で「徳富蘇峰君が二葉亭の『浮雲』を感読して、だれかに『春のや[坪内逍遙]は達者だがわる達者で、例えば湯屋で古手拭いを絞るように書く。二葉亭はそれに比べると酷だ遅筆らしい しかしそれは、一滴一滴滴らす香水だ』と言ったと、その当時聞いたが、いかにも適評でおこりたかったが、おこらなかつた。漸く自覚の境に入りかけていたからである」と書いた一節がある。蘇峰は二葉亭の才能を高く評価していたが、相互の意志が通じるところまではいかなかったようである。	中国 ロシア
<sup>まい</sup> 田 実 10通	1861～1935 文久1～昭和10 新潟県	法学博士。ジャーナリスト。サンフランシスコ・ベイエリア邦字新聞「志やばんへらんど」のメンバー。明治40年カリフォルニアからの年賀状を展示。蘇峰の古稱祝賀記念で出版した『知友新稿』に「ノースクリフとスチード」を寄稿。著書『十二文豪バイロン』	アメリカ

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
前田 正名 2通	1850～1921 嘉永3～大正10 鹿児島県	明治期の官僚・実業家。フランス留学。大蔵・農商務両省在職中、国内産業の実状を調査。生涯を在来産業の育成に捧げて「布衣の農相」と呼ばれた。 〈展示書簡〉大正5年6月24日付 限りなき相手国民と毎日毎日国家の為および申上候 四十年来舌もある筆もあれどもみなしびれ生来ながらの中気になる身は安政の病氣漢葉にて元氣も起り申候 明治の病氣西洋葉表の如く相成 非常の治療不道では朝夕にあやうく相みえ候 老兄せいぜいご心配為し下され候 以上	フランス
三浦 謹之助 1通	1864～1950 元治1～昭和25 福島県	明治・大正・昭和期の医学者。東大卒業後、明治21年ベルツに師事。明治22年ヨーロッパに留学し神経学を修める。東北地方に流行した首下がり病や回虫卵の調査・研究にあたる。 〈展示書簡〉大正元年8月4日付 先帝陛下御大患の節は貴社より時々編輯員御遣し被下候へ共申上げ候事誠に不十分にて汗顔の次第存居候処 本日ハ小池氏を以而維新志士正氣集巻巻御贈与被為下千萬恐縮の至に存候 右ハ今回の奉公と共に好記念として永久保存仕 子孫鞭撻の器と可須 厚く御礼申述候 実に此度の事ハ上下一致官民共同の後援を得事二当り候へ共微力無其功慙愧恐懼の至二御座候	ヨーロッパ
三宅 克己 48通	1874～1954 明治7～昭和29 徳島県	明治・大正・昭和期の洋画家。原田直次郎の鐘美術館に学び、明治30年渡米して、エール大学付属美術学校に入る。翌年ヨーロッパ各地を回って帰国。早くから水彩画に興味を持つ。徳富蘇峰から水彩画の依頼があった時、「夢のように嬉しく光栄」に感じ、島崎藤村と相談して山浦からの浅間山秋色を描いた。その御礼として蘇峰から漢詩を贈られた。「私はこの詩を35年間、家宝として秘蔵している」(自伝『思ひ出つるまゝ』参照) 代表作「雨後のノートルダム」	ヨーロッパ アメリカ
森 次太郎 (円月) 67通	1870～1955 明治3～昭和30 愛媛県	子規の幼なじみ。同志社卒。英語教師。松山中学では安部能成、柏原中学(兵庫県)では芦田均が教え子であった。「ほんまもん」の英語を学ぶため、明治34年エール大学に留学し、38年に帰国。明治39年『吹米書生旅行』を博文館から出版。東洋協会で雑誌の編集の仕事をした。夏目漱石とは、漱石が10年間忘れていた漢詩への興味を呼び起こさせるなど相性のいい友人であった。漱石から次太郎に宛てた書簡は22通ある。(『夏目漱石全集』十四・十五巻収録) 蘇峰とは、戦前も、前後も変わりなく友であり続けた。	アメリカ
矢野 龍溪 (文雄) 83通	1850～1931 嘉永3～昭和6 大分県	明治期の政治家・小説家。慶応義塾卒。郵便報知新聞社長。福沢諭吉の推薦で大隈重信の下で官吏となり、明治14年大隈と共に改進黨を結成に参画。蘇峰・森田思軒・朝比奈知泉主宰の「文学会」出席。矢野龍溪、依田学海らが「文学会」の中心で話題も豊富であった。郷里大分県佐伯の英語教師の人材を蘇峰に尋ね、蘇峰は国木田独歩を紹介した。著書『経国美談』『浮城物語』	ヨーロッパ
山崎 林太郎 12通		浅草区長(大正2年7月～大正8年3月まで) 〈展示書簡〉明治42年7月10日付 万国博覧会の様子を伝えたイギリスからの3通の絵葉書 目下当地にて開催中の万国博覧会(明年開催される日英博覧会場となる筈)の場内一部を観た。日本品として精良なる物品を輸入せる向も僅かにあるが、市中の店頭に於ては陶器・浴衣・扇面其他何れも拙劣粗悪なるもののみで、浴衣地の如きは本国でも見当たらない粗末なるものに候。陶器に至りても同じように粗悪である。その大部は独逸の模造品と承り候。日本品として多数の人に迎えられ候事は如何にも心外に存じ候。明年の日英博覧会を好機会として当業者がこの点に尋思せんと切望に堪えず候 (3枚の絵葉書の要約)	イギリス エジプト

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡航先
<p>山田 忠澄 1通</p>	<p>1855～1917 安政2～大正6 長崎県</p>	<p>明治12年リヨンのラ・マルティニエール工業学校入学。明治14年リヨン大学付属応用化学研究所に入る。明治18年在リヨン日本領事に勤務。キクヤマタ(日本名は山田菊)の父。</p> <p>(山田菊は1897年3月、山田忠澄とフランス人の母マルグリットの間に生まれた。代表作は『マサコ』。フランスで、日本の文化の紹介に尽力した人物) 矢島 翠『ラ・ジャポネーズ』参照</p> <p>〈展示書簡〉 明治36年12月1日付 リヨンからの見開き絵葉書 遙に来る三十七年の新禧を賀し併せて貴社の隆盛及び尊家の幸福を禱る 去十一月一日 西伯利線路經由御発送の貴新聞紙は去廿八日接到 右御参考 まで御一報申上度早々不一 追伸 在横浜知友より去十月廿五日発送中 同 線路經由書信にして去十一月廿日に到着せし毛能之有候</p> 	<p>フランス</p>
<p>S. T. 1通</p>		<p>明治41年1月 カリフォルニアのオークランドから年賀状</p>	<p>アメリカ</p>
<p>愛新覚羅 溥儀 1通</p>	<p>1906～1967 明治39～昭和42 清</p>	<p>清朝最後の皇帝(宣統帝) 在位1908-1912年 満州国の傀儡皇帝(康德帝) 在位1934-1945年</p> <p>〈展示書簡〉昭和6年9月4日付 (読み下し)</p> <p>「清朝が減んだ辛亥革命から二十年たつが、民衆の生活は苦しくなっている。政治を安定させるためになんとかしなければならぬので、御指導を望んでいる。ここに家庭教師遠山猛雄を遣わすので会って欲しい」</p> <p>使用されている便箋は、黄色の絹本である。黄色は皇帝用の色であった。便箋サイズ28.5×19cm 11cm角の「宣統御筆」の朱印が押してある。蘇峰はこの書簡を90歳の時に表装して巻物にし、「満州残夢」と題した。これと同じ内容の書簡を受け取った南次郎陸相と黒龍会の頭山満はそれを東京裁判に提出し、波乱を起こした。(溥儀自伝『わが半生』上下参照)</p>	
<p>Sir Ernest Satow Mason (漢字名) 佐藤愛之助 1通</p>	<p>1843～1929 天保14～昭和4 イギリス</p>	<p>イギリスの外交官。通訳見習いとして文久2年来日。通弁官・書記官として公使オールコック、H. S. パークスを助けて活躍。とくに薩長など反幕派の志士と交わり、反幕派を支持するイギリス対日政策の展開に貢献。明治17年イギリスに帰国し、明治28～33年に再び来日。明治33～39年中国公使として義和団事件などを処理。日本研究者としても著名。</p> <p>〈展示書簡〉 明治37年11月18日付 中国北京より</p> <p>『The Jesuit Mission Press in Japan』の写しを持っているかとお尋ねですが、残念ながら持っていません。しかしどうしてもその本をおしらべになりたいのでしたら、築地にあるアジア協会の図書館に写しがあると思います。私の友人チェンバーレン教授がもっていると思われます。</p> <p>書簡中に見られる『The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610』は1888年に出版されたアーネスト・サトウの著書。</p>	

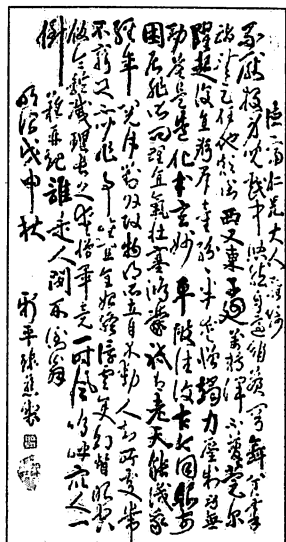


国木田独歩を取りまく人々

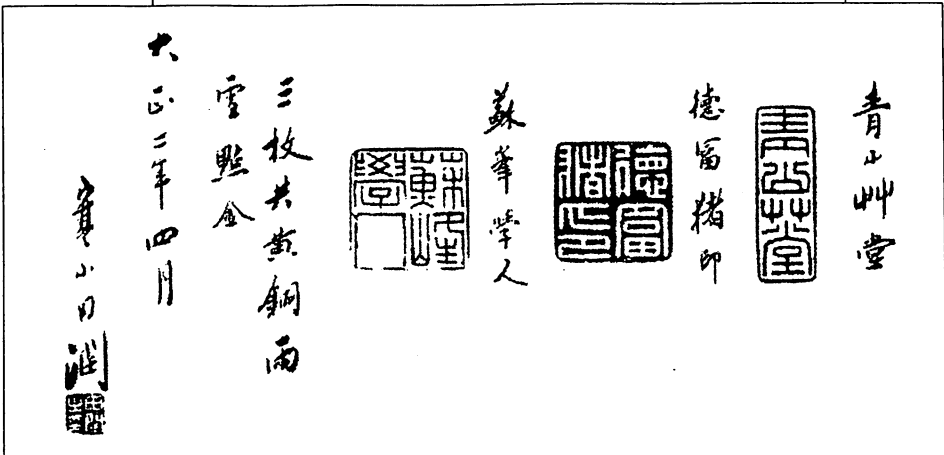
氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
潮田 千勢子 2通	1844～1903 弘化1～明治36 長野県	明治期の婦人運動家。日本基督教婦人矯風会会頭。婦人白標倶楽部代表。長男伝五郎は福沢諭吉の五女光と結婚。足尾銅山鉱毒事件で救済婦人会を組織。現地に赴き、難民を励まし自分の信念で行動した。蘇峰、横井時雄と共に独歩と信子の結婚の保証人となった。	
国木田 収二 5通	1878～1931 明治11～昭和6 広島県	ジャーナリスト。民友社社員。独歩の弟。明治33年「神戸新聞」に入社。蘇峰は独歩より大成すると思っていた。収二は蘇峰の民友社のベッドの側で寝泊まりするほど大胆であり、蘇峰を慕ってもいた。	
佐々城 豊寿 48通	1853～1901 嘉永6～明治34 宮城県	明治期の婦人評論家・社会運動家。仙台藩士・漢学者星雄記の次女。相馬黒光の叔母。横浜ミス・キダー塾(フェリス女学校の前身)で英語を学び、キリスト教に触れ、人格の尊厳、一夫一婦の理念などの思想を養われる。東京基督教婦人矯風会副会頭。婦人の財産権を主張し内村鑑三らに非難される。矯風会の一分派「婦人白標倶楽部」を組織するが、明治22年辞任。26年一家で北海道へ移住。娘信子と国木田独歩の破婚問題で社会的批判を受ける。晩年は内村鑑三の教えを受けた。蘇峰宛の女性からの書簡の中で48通は最も多い通数である。	
相馬 愛蔵 4通	1870～1954 明治3～昭和29 長野県	明治・大正期の実業家。早大卒。蚕種製造に携わる。明治34年上京し、本郷で中村屋(パン屋)をはじめ、後に新宿に開店。特色ある店として知られた。夫人は相馬黒光。	
相馬 黒光 5通	1876～1955 明治9～昭和30 宮城県	昭和期の随筆家。明治女学院、フェリス女学校卒。明治女学校では島崎藤村らに学ぶ。佐々城豊寿の姪。相馬愛蔵と結婚し、新宿中村屋を創業。サロンを作り、ロシアのエロシエンコ、インドのピバリ・ポースら亡命者や芸術家の保護者となる。娘俊子はピバリ・ポースと結婚。著書『黙移』	

本年度展示美術品

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	解 説	渡 航 先
後藤 新平 49通	明治・大正期の政治家。福島県須賀川医学校卒。 明治15年刺客に襲われた板垣退助を治療。 明治23年医学研究のため、ドイツ留学。内務省衛生局長として衛生行政にかかわる。 明治31年台湾総督児玉源太郎に抜擢され、総督府民生局長に就任。台湾住民の習慣を取り入れて優しさのある台湾統治に成功した。 蘇峰を漢詩の師とし、漢詩の添削を願う書簡が多数ある。本年度展示の軸は、明治41年秋に書かれた新平自作の七言古詩で、のびのびとすがすがしい字である。 (読み下し) 厭はず身を兇戯の中に投ずるを、悠然として自適し蒼穹に嚙く、(中略)君聞かずや、事を作すには唯宜しく始終を全うすべしと、浮雲变幻瞥眼空なり、仮令体滅すとも理は長久、愛憎は畢竟一時の風なり、嗚呼、衆人一たび倒るれば再起も難し、誰か是れ人間の不倒翁なる、 明治戊申(明治四十一年)秋 新平録旧製 押印	ドイツ アメリカ ロシア フランス
生没年・出身地	明治31年台湾総督児玉源太郎に抜擢され、総督府民生局長に就任。台湾住民の習慣を取り入れて優しさのある台湾統治に成功した。	
1857～1929 安政4～昭和4 岩手県		



明治41年秋 後藤新平自作七言古詩

氏名(号) (蘇峰宛番簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
高島 北海 3通	1850～1931 嘉永3～昭和6 山口県	<p>明治・大正期の日本画家。初め工部省鉱山寮に出仕。明治18年より3年間フランスのナンシー森林高等学校に留学。フランス人の地質技師にフランス語と地質学を学ぶ。エミール・ガレとも交遊があり、アール・ヌーボーに影響を与えた。</p> <p>高島北海筆風景六幅 箱表書</p> <p>一、瑞仏界ローヌ河上の砲台 一、仏国ナンシー付近の平野 一、北米カスケード山中の急流 一、伊国アマリーマリーナ 一、北米落機(ロッキー)山連峰 一、北米落機(ロッキー)山中河の一部分</p> <p>箱裏書き「是往年予訪北海高島君 従其写生帳摘出請其洒揮而得焉迓来珍口清玩多時今割愛呈呈春秋園主人聊表是微志云尔、蘇叟八十八」 春秋主人とは塩崎彦市(二宮の徳富蘇峰記念館創立者)のこと</p>	イギリス フランス
棟方 志功	1903～1975 明治36～昭和50 青森県	<p>棟方志功と徳富蘇峰記念館の創立者塩崎彦市とは親友であった。志功は蘇峰堂の梅花や四季折々を愛し、しばしば夫人と共に来遊した。彦市の蘇峰に対する姿を通して蘇峰を敬愛した。本年度展示の棟方志功「達磨図」は1975年に描かれたものである。かねてよりダルマは難しいと言っていた志功は蘇峰の達磨画を大変気に入っていたので、塩崎が一枚贈呈すると大喜びしたそうである。はからずも達磨が志功の病床での最後の題材となった。達磨画の賛には「鞍馬石もイイ 貴船石もイイ」とある。</p>	
山田 寒山 (寒山田潤) 10通	1856～1918 安政3～大正7 新潟県	<p>篆刻家・文人。熊野の海福山最明寺で住職をつとめた時期もある。昭和5年、寒山和尚十三回忌に、養嗣子の山田正平と寒山の妻ツネが最明寺に分骨を埋葬している。蘇峰との関係の深さは正平が寒山七回忌に印行した『羅漢印譜』が蘇峰に贈呈され、それに対し蘇峰は寒山追悼文(大正13年12月28日『国民新聞』夕刊一面トップに掲載)として「寒山後あり」と称賛したことからうかがえる。蘇峰はいくつかの印の篆刻を寒山に依頼しており、寒山からは印譜が送られてきている。(柿木原くみ「文人山田寒山・山田正平(資料編・1)」書学書道史研究第13号参照)</p>	
			
大正2年4月に蘇峰に送られた山田寒山の印譜			

氏名(号) (蘇峰宛書簡数)	生没年・出身地	解 説	渡 航 先
吉田 初三郎 36通	1884～1955 明治17～昭和30 京都	画家・鳥瞰図師。洋画を目指して鹿子木孟郎に弟子入り。「阿蘇周辺図巻」を昭和20年蘇峰の依頼により描く。 「阿蘇周辺図巻」の裏面に書き込まれた初三郎の説明文 「去る八月十日の敵機兇爆に至近弾を受候時 強烈なる爆風と共に激甚なる火薬 煙硝 泥水の飛沫等に包まれ候ためか 画面全体の色彩著しく変色退色仕り一時は殆んど手の付けようもなく、傷心に候が 漸くここまで補色修正を遂げ申候事 実に望外のよろこびに御座候 追て小生が衷心よりの念願は本図を天地六尺左右四間の屏風として謹筆 より更らに詳細なる作品を世に捧げ候 国家の前途に貢献仕りたく存じ居り候 幸ひに先生の尊き御指導に浴し得ば幸甚至極に御座候 初三郎」	中国



吉田 初三郎 画 鳥瞰図「阿蘇周辺図巻」			
神社及神宮 印信		本年度展示の印譜の二軸は初展示である。「神社及神宮印信」と箱書きされたもので、昭和8年軸製作者が、神社の御朱印の順序を、長い日本の歴史を鑑みてどのような配列にしたらよいかと書簡で蘇峰に尋ね、蘇峰の意見をもとに印譜を二軸に納めた。全部で御朱印は121社で、一軸に官幣大社58社、もう一軸に官幣中社、国幣大社・中社、別格大社63社が捺されている。	
「李慈藝告身」 写真		この「李慈藝告身」の実物の所在は現在のところ不明である。写真台紙(縦17.5×54cm 表は黒字、裏は無地)の表に4枚の写真が並べて貼付されている。当時50歳であった蘇峰が墨書により裏書きしており、この告身が撮影された前後の経緯が考察される。この裏書きによれば、一連の写真は明治45年6月16日に東京築地の本願寺で撮影されたもので、実物は 大谷探検隊の橋端超によって将来されたものであったことが知られる。(小田義久 『徳富蘇峰記念館蔵「李慈藝告身」写真について』龍谷大学龍谷学会「龍谷論文集」第456号 参照)	
奈良の板戸		縦148×横65cmの板戸2枚が鹿皮の紐で上下二ヶ所で結ばれていた。屏風として使われたのであろうか。板戸の表の絵は薄くなっているが、赤の漆と白の彩色はよく残っている。絵柄は閻魔大王が人間の現世での罪状を判断し、罪の重さを計って、審判を下している図である。計りには人間がのせられている。	

参考文献

『蘇峰とその時代』『徳富蘇峰宛書簡目録』『徳富蘇峰記念館展示目録』(1)～(20)『コンサイス人名事典』  
『日本近代文学大事典』『新潮日本人辞典』『近現代日本女性人名事典』『同志社山脈—113人のプロフィール—』

# 蘇峰堂便り

幕末にはるか海のかなたに目を向け、踏海の夢を持ちながら、それを叶えることができなかった先人に、吉田松陰がいた。

記念館一階常設展示ケースに置かれている、吉田松陰直筆の「三余説」という色紙は多くのことを物語ってくれる。

吉田松陰（一八三〇〜五九）は、一八五四年ペリー来航の際に密航を企てたが失敗し投獄された。獄中であつて記したものが「三余説」である。

「三余」とは「読書三余」という中国の故事で、三國魏の学者董遇が読書に都合の良い余暇を冬（一年の余り）、夜（一日の余り）、雨（時の余り）とし、読書する時間はいくらでも見つけることができるということを示したものである。松陰は、自分が獄中にあつても読書ができるのは、冬・夜・雨といった天道の常を超越した「君父の余恩」、「日月の余光」、「人生の余命」という「三余」を授かったからであるとして、自分の境遇に深い価値を見出している。

徳富蘇峰はその著書『吉田松陰』で「彼は天成の鼓吹者也。感激者也。」と時代の率先者、実行者であつた松陰を評した。「読書大義に通ず」とし、読書に大きな意義を感じていた蘇峰と、自身の「三余」に感謝し、読書を続けた松陰、それぞれ姿勢に私たちは学ぶことが多い。書に親しむことを何より大切にしたい二人には心の余裕という「余」が存在したように思う。自分の時間の中にスペースを見つけて書に親しむことができたなら、「三余」とまではいかないまでも、それはすでに松陰流といつてもいいのではないだろうか。

宮崎松代

週末のコンサートはヴィヴァルディーのグローリアから始まった。曲想は、渡航する明治期の人々の想いのように広がる。バロック音楽の祈りの主題が明治期の渡航者の心理と重なった。

今年で「海を渡った先覚者」展は最後である。

人は誰かに個人的な想いを伝えたいと思う。その手段は現在ではeメールであつたり、チャットであつたり、携帯電話であつたりする。明治・大正期に於いてはその手段の多くは書簡であつた。この伝達授受のツールの違いは、社会や人間をどのように変化させたのだろうか。デジタル技術で時間を操る現代人と、ゆっくり手紙を書いていた時代の人とは、心の余裕と時間の余裕がどう違うのだろうか。

私の心象風景の中にある父母世代の姿を思い起こすと、好みの用箋に手紙を書いている姿がある。そこには心と時間の余裕を感じる。現在の私たちは、世界中の人とリアルタイムで話をし、自由な意見交換の場を持つという新しいメディアの利点を享受するが、膨大な情報量の中で時間に押し潰される様な気持ちになることがある。

記念館二階に展示されている百年前の美しい絵巻書や書簡を見る度に、今の私たちと昔の人たちの心の余裕について考える。

ゆるやかに歩む者はすこやかに歩む

すこやかに歩む者は速くまで歩む

これはギリシアの諺である。そうだ、現代の「速さ」にこだわることなく、ゆっくり、ゆったり生きていこう。

和田千枝

## 編集後記

● 昨年展示している吉田初三郎画「鳥瞰図」阿蘇周辺図巻は、多くの方々から反響がありました。美しい鳥瞰図をお楽しみください。

● 川上音二郎一座がパリで録音した「オッペケペー」のテープを、2階特別展示室で聞いていただきます。まるでラップ音楽のようなリズム感があると、好評です。

● 本年2月にテレビ神奈川の「ぶらり旅気分」という番組で、二宮町特集があり、職員宮崎の説明により徳富蘇峰記念館が紹介されました。静岡から訪ねてくれた女子高生は、勝海舟の書簡に大変感動していました。

（高野静子・宮崎松代・和田千枝）

平成十六年七月十二日発行

編集 高野 静子

発行者 竹 越 起 一

発行所 徳富蘇峰記念塩崎財団

〒三五九〇三 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五

TEL 〇四六三二七一一〇二六六

FAX 〇四六三二七一一〇六七七

ホームページ

<http://www2.ocn.ne.jp/~tscho/>  
E-mail:tscho@peach.ocn.ne.jp